



TITLE:

戦争と道德の原則

AUTHOR(S):

財部, 静治

---

CITATION:

財部, 静治. 戦争と道德の原則. 経済論叢 1922, 15(5): 771-777

ISSUE DATE:

1922-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127958>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五卷 第五號

大正十一年十一月一日發行

## 論叢

交通税の長短 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

傳統派の社會連帶思想 . . . . . 文學博士 米田 庄太郎

社會哲學<sup>に於ける</sup>の主意的二元論的思想 . . . . . 法學士 恒 藤 恭

經濟道と經濟術 . . . . . 法學士 作田 莊一

## 時論

我國の人口對食糧問題 . . . . . 法學博士 山本美越乃

食料品市場問題 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

## 資料

金輸出解禁問題 . . . . . 法學博士 戸田 海市

## 雜錄

戰爭と道德の原則 . . . . . 法學博士 財部 靜治

物價引下策と抽籤景品附賣買 . . . . . 法學博士 小川郷太郎

排マルクス說の新刊書一二について . . . . . 法學博士 河上 肇

日銀兌換券發行高の季節的變動 . . . . . 法學士 沙見 三郎

## 雜 錄

### 戰爭と道德の原則

#### 財 部 靜 治

無類の勝戦を幾度か重ねたる後、武裝を解いて敵に降り、史上殆んど未聞なる、辛酸を嘗むるの外なきに至りしは、何故なるかとは、世界

Zukunft der Kultur. 1920 として公けにせるものに就き、之を窺ひ得べし、説の當否は兎も角、着眼自から高邁にして、愛國の志氣抑すべきものがあるが如くなるのみならず、米國近年の流行思想、否その思想に基づく施設の形骸を眞似て、社會奉仕など、驕ぐ態度には、一大警醒たるが如き心地せらるゝを以て、今之を譯載することゝせり。

大戰後に至り、獨逸に於て屢發せられたる疑問なるに似たり、而して之に答ふる者、或は他の諸國民が政治上の經驗に長け、従ひて外交上の巧みなる折衝に、卓越せるがためなりと説き、或は又交戦諸國民は長き戦争のため、漸次に内心より、之に倦むに至りしか、特に獨逸國民は敵の優勢なるを見、その念最も強かりしがためなりと説くに反し、「予は信ず、斯くの如きは副動機にして、決定的原因たらず」と、駁せし Wilhelm Wundt の所説は、氏の著「民族心理」第十卷「開化及歴史」の末章を、別冊 Die

氏は先づ獨逸に缺けたるものは、確固なる目的たりき、敵國は凡て大戰の初めに際し、之を懷きたり、而して此目的は、各國民につき各別たりき、佛蘭西人にありては、エルサス、ロートリゲンの喪失に對する報復なり、英人にありては、脅かし來れる獨逸の經濟的優勢たり、露西亞帝國にありては、獨逸の勢力を脱せんとするの努力、及露西亞國民を激勵せる、西歐化の傾向なりき、されど是等の敵國は凡て、その態様一ならざるに拘はらず、同一なる國民主義の動機により、結局結束されたりと論じおきつゝ、國民主義の大勢力、第十九世紀の後半紀中、

優勢なる志氣として、益々擡頭し來り、遂に大戦に至れる來歴の畧論を掃み、開戦間際の事情、及獨逸事情の評論を以て之を承け、又その評論を以て、論文の骨子たらしめたり、吾人が専ら紹介せんとする所も、此部分にあり。

Edward 七世及 Poincaré の、有名なる旅行以來、獨逸に對して計畫されし、戦争準備あることは、世界周知の事實となれるより、獨逸政治家政治的聰明上、如何に缺けたる所ありとは言へ、尙戦争を豫想したり、戦争は同様に又可なり有名なりしが如く、約一年後に同盟國側よりも計畫されたりしが、遂に Sarajevo の暗殺は、戦争爆發の信號となれり、右の事情は漸次戦争前及戦争中に至り、新證據により屢立證せられ、ために最早之につき、一語を費やす要なきに至れり、されど世には一罪人あり、自から犯せる犯罪を、幸にして犯されたる相手の罪に、嫁せしめ得べきことありとせんか、そは恰も右の事例につきて起れり、即ち獨逸は率先宣戦せるのみならず、久しく之が準備に當れりと誣ひ

られたり、加之全世界の中立國は、聯合軍側の新聞により漸次に説得せられ、一般平和の攪亂者視されたる、獨逸帝國に對し宣戦するに至れり、而して獨逸人を以て、慘虐なる蠻人と誣告し、何等分別ある理由なきに、突如として文明界を襲へりと、信せしむるに至りし手段數々ある中には、獨逸の文筆家にして苟しくも愛國者視すべき者たる限り、殘らず侵畧心に燃えし話あり、されど之が反證者として、恰も確かに多くの學者の代りに、擧げられ得べき者 Fichte に如くはなし、彼れは如何なる政策に對しても、侵畧政策に反對せるに比し、一層劇しき言説を發したることなし、即ち氏は一八一三年「眞の戦争」に關する演説を試み、その聴衆を獨立戦争の軍屬下に、趨らしめしに當り、明言したり、戦争が許さるゝのみならず、神聖なる義務視さるべきは、唯一の限合に限る、そは敵が祖國の自由及獨立を、疑はしからしむる場合にありと、看る可し彼は實は一の平和論者たりしを、

さればとて素より自國民の存亡に無關心たりしが故に、然るに非ず、寧ろ平和を保つことのみか、國家の國民的職分と一致すべしとせるが故に、之を保持するの義務を、最高義務として重んじたり。

かくて獨逸國民そのものを以て、戰爭の發頭人たらずとし、又獨逸の軍事的成功のため、東にても西にても又陸上にも海上にも、獨逸をして眞實に勝利者たらしめたること、世界の周知せるが如くなりしに拘はらず、この勝利に連結せしむるに敗北を以てし、その連結に照し史上虞らくは、未聞の敗北視すべきものありとせば、そは如何にして釋明すべき、人或は之につき獨逸の施政上拙劣なるものあり、世界事情を察するの明と、先見の明とを缺きしことを擧ぐ、實際上獨逸の主宰政治家は、聯合軍側に所屬すべきこと、豫知さるべかりし白耳義を占領することにより、國際法を破らんと宣言せる際、曲事と知覺さるべき一失策白狀を伴ひつゝ、戰端を開けるものなれば、彼は自家無能の

一證據を、當初より敵手に委ねたるものにして、そはその後も打消さるゝことなかりき、されどかゝる政治家が、危急の殆んどあらゆる瞬間に、邪曲を遂げんとせるは、熱心によるものなるのみならず、そは概して信念の不和によるものたりしは明かなり、その不和は議會の諸政黨により、一般公衆に傳へられ、結局又爲政者そのものに抄からず傳へられし所なるが、實にその不和の根源は、獨逸の政治的過去に宿されたり。

第十九世紀は獨逸識者の大部分、特に同國經濟學者及法律家にとりては、英蘭實嘆時代なりき英の自治制度、英の商業、その政策の自恃安<sup>ズイ</sup>、全は模範視せられたり、今日尙此傳習に養はるゝ時代相か、伯林の官界に重きをなせるは怪しむに足らず、然るに之に對して他の一群あり、東歐に味方するの傳習に耽り、結局 *Bolshevism* に訴へて迄も、平和を結び得と信せしことも、同様に了解され得べき所なり、之と共に悲觀的平和論も始めよりなしとせず、特に

内治上の諸改良を迫りし民主黨と結託して、非戰政策を奉じたり、その外獨逸の帝國議會は、この大英斷を要するの時期に際會し、その事自體としては確かに不正となし兼ねざるは言へ、英佛の議會に古くより授けられしが如く、勢力を振ふの權能を要請せるが、獨逸に於ける諸政黨は、恰も不幸にして國民の利害よりも、寧ろ他の宗教的、經濟的又は地方的利害に、通曉する所遙かに大なりし事情あり、かゝる錯亂の結果として、其の初め社會民主黨中の萬國派のみ、幾分か堅き結束を保ちて凡て是等の政黨に對立し、始めより戰爭に反對せるに過ぎざりしもの、右の如き分裂過程の末尾に至りては、その始めよりの主張通り、平和を結はしむるの凱歌は、結局之により揚げられ、かくて又その義務も解かれたるの、顛末を示せり。

右の事情により、尙他の一結果は惹起されたり、その結果たる既に Marx 及 Engels により一八四七年の社會主義宣言中、豫言されたる所なり、即ち勞働者階級が勝利を擧げたる瞬間に、

階級てふ概念は、全くその存在の資格を失へり、數年來所謂第四階級の發展により、告示されたる狀態に起れり、素より世界戰爭中敵により、獨逸に加へられし外面的障礙も、重きなせるものとして、勘定に入れ得べきも、是等のもの以外凡て是等の外面的條件に勝れる、一動機は考へらるゝの要あり、それは恰も獨逸國民の深き好治心と關係あり、この動機は獨逸人の國民感念を徵表せる、道德的意氣の特質中に備はれり、唯その意氣たる古自然法行はれし當時以來、國際的學問により獨逸に及ばされたる、卓越せる力のために、その國家觀及國家の職分觀にありては、素より抑壓されたり。實に他國民特に西歐諸國民に對する、獨逸人の特質につきては、戰爭の經過中及その結果に於ても、夥しく議せられたり、されど之は解釋として、公文書及公けの告知に示されたる所にては、同様に西歐諸國民の、私人及政治道德を左右し、一般に現時の記號となれる、思想系を辿れり、即ち獨逸に於て實際生活の通用格言より、國家學及

法學の學理的議論に至る迄、自明視さるゝを例とせる主義は「功利主義」なり、その私人道德に關する原則は

各人は自己のために、最も有利なるもの、詳言すればその身的幸福を最も多く、助長すべきものをなせ

この規則なり、之と共に公共道德、特に政治界に行はるべき道德の原則として、他の規則あり  
出來るだけ最多數の人に、出來るだけ大なる幸福を、享受せしむべき一般狀態は、最良なり

とするは之なり、そは西歐諸國民の大道德論者 Bentham が、此主義を命名せる如く、「幸福最大化」の規則なり、この道德觀が現今歐洲諸國民の良心を、如何に強く支配せるかは、この民族戰爭を、戰爭につきて出されたる文獻により、判斷せんとする者か、想ふに次の結論に到達すべきを、見ても明かなり、即ち彼は戰爭が究極に於ては、特殊の物質的經濟的利益のためにのみ行はれたること、又彼は右の文獻を以て、虞ら

くはあらゆる開化の物質的基礎に關する、Kant Marx の學説を、強く實證するの資料と觀じ得べきことを、その結論として得ん。

されど尙精察すること、せんか、事柄は全く異なる一外觀を呈す、即ちその際固有の功利主義は、嚴然たる私慾主義と、第十九世紀の獨逸哲學を、風靡することなりし唯心主義との、中間方針視すべきものあり、されど之と共に唯心主義の方へよりも、私慾主義の方へ傾けるもの、遙かに多きは素よりなり、蓋し功利主義はそのものとしては結局俗人の私利的道德が、心理的動機に媒介されて變形せるものなればなり、而して私慾主義及功利主義の原則に對立し、獨逸の唯心主義に熟成せる、道德的義務の思想を最も適切に徴表せし、原則視し得べきもの何たるか、此問に答ふるため、學者により Kant の有名なる次の立説は擧げらる、即ち

汝の意志の箴言が、同時に一般立法の原則として、通用し得べきが如く、行動せよとせるに存するは之なり、この道德觀を生

むに至れるは、弘く讀まれたる Kant の著書「恒久平和論」にありとす、されどかく觀するは一の謬斷なり、蓋し右の著書は同時に、諸國に普及せる文獻の一なり、之が普及につきては、他の點に於て大にその方向を異にせる、多數文人關係したり、Kant の道德時にその政治道德上の、最終基本につき判斷する所あらんとせば、その著「恒久平和論」に據るべきに非ずして、一七九七年に於ける氏の形而上學的法律論、之と共に又當然實際理性批判論を、參酌するの要あればなり、即ち是等述作中、無限に深き眞面目は顯はさるゝも、その私人道德論上かく眞面目なるを得たるは、強き義務觀念而も亦あらゆる幸福説 Eudämonismus を嫌へる、義務觀念によるものなり、この理由あるがために國家に對する Kant の關係は、半ば私慾主義的たり、半ば功利主義的なる、古自然法の立場に外ならざりき、從ひて國家による少年の教養、一般精神開化の扶植と言ふが如き思想は、全く彼の眼中になかりし所なり、國家は生活の外面的貨物に

つきてのみ、處理すべきものとなされたり、かくて獨逸の新唯心主義が私的并に公共的道德一切の、本來内容として通用せしむるに至りし原則を、唯一の主義に總括せんと欲せば、それは寧ろ Heraklit の思想にあり、Ferdinand Lassalle がその思想に與へたる、形式によりて然りとす、即ち

一般公衆のために、己れを棄てよ、それは道德的なることの、永遠概念なり

とするにあり、俗的合理主義により、曖昧と呼ばるゝを例とせし、右の希臘思想家が明快の秀逸を盡して、言明せるものを Fichte は極めて簡潔に「何時も汝の使命を盡せ」との、訓戒に編めり、Hegel も同じ思想を、他の形式により表白せり、即ち彼は Kant の道德訓を以て、その規矩的原則たらしめ得べしとせる、個人道德に對し、一層該博又深遠なる概念としての、「有道」 Sittlichkeit を對立せしめ、その概念下には個人個別の生存以上に超越せる、道德的權利義務の範圍全部を、包容すとせり、この識別た



る Tactus の立證によるに、夙に白耳曼民族の太古に於て、その道德生活を支配せる所にして、又數世紀を通じ、獨逸生存協同體の團體精神中に、再發されたる所なり、されど世界經濟の精神、及その結果として偏面的に象とられたる、功利主義の道德は、英國に發せられ、諸國民の道德的、一般常軌となれるが如く、獨逸國民も亦同一影響を免がるゝを得ざりき、かくて新獨逸帝國の建設以來、經歷されたる半世紀は、技術の範圍に於て著しく進歩せるに拘らず、餘りに物質利益を計るに、汲々たる時代たりき、かくて今日尙最近戰爭に關する文獻に照し、その戰爭が概して對外的勢力及經濟的競争の、問題に外ならずこの印象を、得せしむるの餘地あるが如き、事態を生じたり、されど實はその戰爭準備上、國民主義が大なる勦をなせるを看、右の事情以上に一層深き、利害衝突の事由加はり、そは諸國民間に平和の新交通を、開かしむるに先ち、大戰によりその調節を、計らしむるの要ありしことを察すべし、而も亦 Fichte が始め

てその自然法觀に於て、表明せる思想、即ち各人が世にあるは、社會のために然り、個人のために社會あるに非ずとするの思想を以て、最も有力なる支柱、否根本に於ては之を唯一の支柱となしつゝ、現存せる特權及資産不同に反對し、一層正當なる社會秩序を要求することに、抵抗し難き力は伴ふこととなれり、右の思想たる現今法學より、失はれたるのみならず、國民經濟に於てさへ、殆んど全く喪失さるゝがために、經濟學の令名ある代表者に對し、Fichte が前世紀最初の國家社會主義者たりしことを、彼に保證したりとせば驚くの風あらん、右 Fichte の思惟に於ける燦爛は確かに Ferdinand Lassalle に傳へられしも、既に Lassalle にありては、煽動者たるの傾向に富み、この思潮狂げられて、社會階級鬭爭の教儀は揚言されたり、而して Marx 及 Engels に至りては、Hegel の歴史哲學觀に、踏み違ひたる説明を下すことにより、右國家社會主義の唯一の正當なる道德的基本は全くその反對に曲げられたり、かくて現時の社

會、民、主、主、義、は、保、持、さ、れ、得、べ、き、唯、一、の、國、家、社、會、主、義、に、對、し、背、馳、せ、る、反、對、相、を、示、す、の、み、な、ら、ず、その主義により戦はんことを。資本家本位主義と同一なる、物質的社會道德の地歩に立てり、故に眞の社會主義は、Marx 派の道德をその反對面に、轉換することにより、始めてその再來を期し得べく、Kant の嚴正なる義務道德を、土臺とせる獨逸倫理は、この轉換を貫徹するの使命を帶ぶことにつき、何等の疑を挿むを得ず。